

# 万葉集における「海人」について

岡村 美恵子

万葉集中に海人を歌った歌は数多い。その海人の実態がどのようなものであったのかを探る試みが応神天皇の時代に置かれたとされている海部の研究を中心として様々になされている。

しかし、万葉集の歌に何故海人が歌われなければならなかったのか、海人を歌うことに表現としてどのような意味があるのか、ということについてはあまり考えられていないと思う。そこで、あくまで歌において「海人」がどのような意味を持っていたのか、それを歌うことによってどのような効果が得られたのか、ということに着眼し、海人を歌った万葉集の歌について考えてみることにしたい。

## 一 異界としての海

はじめに、海とはどのような世界であったのかを考える。海が特別な世界であったことは記紀における火遠理命の海神訪問の仕方によくあらわれている。

(鹽椎神は) 无間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひしく、「我其の船を押し流さば、差暫し往てませ。味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往てませば、魚鱗の如造れる宮

室、其れ綿津見神の宮ぞ。(略) (古事記)<sup>(1)</sup>  
乃ち無目籠を作りて、彦火火出見尊を籠の中に内れて、海に沈む。即ち自然に可憐小汀有り。是に、籠を棄てて遊行でます。忽に海神の宮に至りたまふ。(日本書記)

これらの描写で特に注意したいのは、記紀ともに綿津見神の宮へ行く過程を明確にしていないうことである。古事記の「味し御路」では「味し」が立派な、完全なといった意味を持つほめ言葉であることに着目できる。どのような道か想像し難いが、少なくとも鹽椎神だけが知っている。それを神の通るべき道と考えることはできるだろう。書紀には「自然に」とあるが、これは全ての一書にみえる表現である。

人間にとって本来、不可知な、従って「自然に」というしかない過程が綿津見神の宮への道である。つまり、人間がただ海上を進み、海底に潜ったとしても、それだけではたどり着けない。

その道をたどったもう一つの例として弟橘比賣の場合があげられる。彼女は綿津見神のもとへと海に入ったが、ただ海中に身を投じたわけではない。古事記では「菅八重、皮八重、緇八重を波

の上に敷きて、其の上に下り坐しき。」とある。この畳を八重に敷くというのは火遠理命を迎える際、綿津見神のしたことである。これは綿津見神が訪問者を迎える時の一つの形式であろう。弟橘比賣もそれをふまえて入水する。即ち、ここにおいて、彼女は火遠理命と同様、綿津見神への訪問者たり得るのである。

火遠理命は「无間勝間の小船」に乗る、という形式をふんでいゝる。この船は中が中空になっているいわゆる「うつぼ舟」である。

大岡小霧氏は柳田国男氏、折口信夫氏の説をもとに、こうした「うつぼ舟」が神の依り代、魂のいれものであったと述べ、さらに、地方によって柁をフネ、入棺をオフネイリと呼ぶ例のあることも指摘している。<sup>(2)</sup>このことから考えると、「うつぼ舟」に乗った火遠理命の海神訪問とは、その魂の異界への移動を示すものであるといえる。それは当然日常的な知覚のもとに行われるものではない。おそらく先に見た記紀の表現のあり方はそのことを示している。

魂の移動と海との関りを考えたとき、もう一つうかんでくるのが、折口信夫氏の説く、海の彼方にある魂の集まる国、常世国である。<sup>(3)</sup>この、海の彼方から魂がよせて来ては人に宿り、靈威を与える、という幻想があったことに注目しておきたい。もちろん、魂の集まる国というのは人間にとって異界である。

海が異界であったということは記紀の三貴子分治の記事にも象徴的である。多少の記述の違いはあるが、結局、海は高天原と区別された世界として、天照大神の支配外におかれている。従って天孫の治める葦原中国にとってもそれは同様なのであり、この事からも異界としての海のあり方を考えることができるだろう。

## 二 寄せる波

海から寄せてくるものとして、まず波をあげることができる。万葉集中に波を歌った歌は実に数多く、それだけに重要視されていたものと思われる。波は沖で立ち、然る後に岸边に寄せてくるものであった。

奈呉の浦に船しまし貸せ沖に出でて波立ち来やと見て帰り来む  
(巻一八・四〇三二)

沖とは海の奥の意である。海の底もまた沖とされており、私達の考える沖とはやや違った概念で理解されていたらしい。万葉集中の「奥」はほとんどがこの海の奥であるが、一方で「奥山」という語がある。

「奥山」の用例を見ると、その多くが岩に生ず蘿、根の深い菅、真木など、神聖な植物のある「恐き」場として歌われている。神聖でみだりに入ることの出来ない場所、人間の活動できる世界の果て、といった意が「奥」にはあるといえるだろう。

波はそうした神聖な海の奥で、いわば神意によって立ち、寄せてくるものと考えられていた。

大海の波はかしこし然れども神をいはひて船出せばいか(巻七・一二三二)

大海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯の清けさ(巻七・二二〇一)

波を鎮めるためには、呪術を行い、神を鎮めなければならぬ。高く、大きな波はそれだけ強い神の力を表しているから「恐き」ものなのである。しかし、一方、浜辺にそうした神威の表れである波

が寄せてくることは、それゆえに素晴らしいことでもある。従って、波にあらわれる浜、磯、浦はしばしば「清けし」などの言葉で讚美されるのである。<sup>(4)</sup>

こうした浜辺は絶えず異界から寄せてくるものにさらされている特殊な場所といえる。そこで、これらの場所を「見る」と歌った歌が目立つことに注意しておきたい。

思ひつつ来れど来かねて水尾が崎真長の浦をまたかへり見つ  
(巻九・一七三三)

若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも(巻七・一一七七)

中西進氏は「見る」ことが古代人の第一の知覚であり、目には魂がやどり、「見る」ことは魂の威力の発現であると指摘している。また、それは呪能を持つ行為で、不可視である魂にまで渡る知覚であったと述べている。<sup>(5)</sup>

「見る」がそうした知覚であったとすると、浦や浜を「見る」とによって、人は沖から寄せてくる神の威力を受けることができたといえるだろう。このことは折口氏が常世国から来た魂を人が受ける、としたことと同義に考えてもよい。浜、浦などはそうした威力を受ける場所であるから、讚美の対象となるのだともいえる。

神の威力は沖の方でより強いはずである。しかし、神の世界たる沖ではその力が強すぎて、むしろ人間にとって「恐き」場になってしまう。おそらく、人が立ちいることは厳重な禁忌であった。だから、普通の場合、人が海の威力にあずかることのできる範囲は専ら海辺に限られた。

歌の世界の中で、海人の姿が目立つのも、やはりこのような浦、

浜である。そして、海人の行う漁は寄せてくる神の威力を獲得する活動としての一面を持つと考えられるだろう。そこで、このような観点から、次に海人の作業の歌われ方、その意味を考えることにしたい。

### 三 釣する海人

万葉集に歌われる海人の釣の大部分は舟、「釣舟」に乗り、海上で行なわれている。

釣によって得られるのは、勿論、魚である。大林太良氏は、日本の古代に、王権の根源を海に求める観念が存立したとして、その一例に、仁徳とその弟が帝位を護り合い、「我、天皇に非ず。」と、海人からの貢献品を受けとらなかつた、という書紀の記事をあげている。<sup>(6)</sup>

おそらく、魚には王権の確立につながるような呪力があると信じられていたのであり、魚をとることはその力を得ることにつながる行為であったのだろう。釣はそうした呪的な意味を持つ特殊な作業であったに違いない。

日本書紀仲哀天皇九年条には、神功皇后の釣占いとも言うべき記事がある。

夏四月の壬寅の朔甲辰に、北、火前國の松浦県に至りて、玉嶋里の小河の側に進食す。是に、皇后、針を勾げて釣を為り、粒を取りて餌にして、裳の樓を抽取りて縉にして、河の中の石の上に登りて釣を投げて祈ひて曰はく、「朕、西、財の國を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば、河の魚釣飲へ」とのたまふ。因りて竿を擧げて、乃ち細鱗魚を得つ。(略)

是を以て、其の國の女人、四月の下旬に當る毎に、釣を以て河中に投げて、年魚を捕ること、今に絶えず。唯し男夫のみは釣ると雖も、魚を獲ること能はず。

この釣の目的は魚を捕ることではない。神意を問うことが目的であり、呪術として行われている。魚を釣にかけるのは神の力によるのであり、神の許しがない時は魚も釣れないのである。釣とはそうしたものであり、だからこそ釣による占いがあり得たのだろう。

このことをもっと明確に示しているのが、先に記した火照命と火遠理命の神話である。火遠理命は兄に互いの「佐知」を交換することを申し出るが、三度拒否される。それを押し切つて兄の代わりに釣を試みるが、魚は得られず、しかも釣を失つてしまう。

これは釣によって魚を得ることが、実は火照命にしか出来なかったのだということの意味している。火照命以外の者が釣をすることは許されないことであつたと言つてもいい。火照命の三度にわたる拒否はそれを表している。火遠理命は自分の持ち物から五百、千本の釣を作つて兄に差し出すが、それらは「正本の釣」ではないとして受けとられない。これも単に兄のいやがらせであるというだけではないだろう。「正本の釣」でなければ、本当に魚を釣ることは出来なかつたのだろう。

そもそも海は異界であり、魚を捕ることはそこから呪力を獲得することと等しい。その魚は海の神のものであるから、それを捕る者には、いわば異界と通じることのできる特殊な能力が不可欠であつたはずであると考えられる。

海人とは実はそうした能力をそなえた特殊な存在であつたといえるのである。

銅飯の海庭好くあらし刈薦の乱れ出づ見ゆ海人の釣舟（卷三・二五六）

風を疾み沖つ白波高からし海人の釣船浜に帰りぬ（卷三・二九四）

万葉集中、海の状態を「くらし」と推量によって表現するときの根拠は基本的に、右に挙げたような海人の船の様子である。（他に鶴の鳴き声を挙げる例が若干あるのみ）

海上に自らいれば海の状態もわかるだろうが、そうではなく、少し離れた所から海をのぞんだとき、それを教えてくれるのが他ならぬ海人の船なのである。

海人はその活動を神に許された存在であるから、神の意志のあらわれである波の様子を知り、船を操ることができる。そこで彼らの様子が神の意志を示す指標となり得るのである。

海人が水手として活躍していたことは仁徳紀などにみえる。日常、海で働き、海路や航海技術に長けていたからであろうが、それだけが活動の理由ではないと思う。波を鎮め、海を渡るために神をまつる歌があつたように、船を動かすには、実際の技術を持つ以前に海の意志を聞き、その力を受け取る能力がなければならなかつた。

仲哀紀に次のような記事がある。

是に吾瓮海人鳥麻呂といふをして、西海に出でて、国有りやと察しめたまふ。還りて曰さく、「国も見えず」とまうす。又磯鹿の海人、名は草を遣して視しむ。日を数て還りて曰さく、「西北に山有り帯雲にして、横に縋れり。蓋し国有らむか。」とまうす。爰に吉日を卜へて、臨発むとすること日有り。

神功皇后の新羅征伐にあたって、新羅国の影を檀日浦側から海人に望み見させたという記事であるが、はじめの海人には国が見えなかったという。一方で、この部分の前の記事によれば、仲哀天皇にも同じように国は見えなかった。天皇は神の言葉を疑いつつ海を望んだのであり、国を見出せなかった上に、結局は神の怒りにふれて急死してしまう。このことから、新羅国を望み見ることが出来るかどうか、単に視力の問題ではないことが理解できる。国を見ることのできた磯鹿の海人は神の力を受ける能力が格別に優れていたのだろう。たしかに、実際には海に慣れている海人だから、沖を望み見る能力に長けていたのだろうが、その能力とは重ねて述べているように、視力や技術の優劣といったものではない。海人の航海に関する能力は、海の神の力を受ける呪的能力であったと思われる。こうした力をもつ海人の特殊性がはっきりあらわれているのが、海人の夜釣りである。

古代においては、昼が人間の活動すべき時間、夜はそれが許されない神の時間、という時間意識が存在していたと思われる。漁火をともし、夜釣りをする海人の姿はその例外といえる。多田一臣氏はこの夜釣りを神の行いの模倣としてとらえられるとしている。<sup>(7)</sup>

これまで、海人は海の神の許しのもと、その力を受ける能力をもつ存在であるとしてきたが、夜釣りをする海人の姿はむしろ限りなく神に近いものであるといえるだろう。

山の端に月かたづけば漁する海人の燈火沖になづさふ(巻一五  
・三六二三)

能登の海に釣する海人の漁火の光にい往け月待ちがてり(巻一  
二・三一六九)

海人の夜釣りを示すのは漁火である。これが沖に遠く見える様子が歌われる。三一六九は月のない闇夜であることがわかる。闇夜は一層強い禁忌の時間であったはずであるから、漁火に照らされた海人の夜釣りの特殊性がよくうかがえるだろう。

闇の中、遠く沖に見える漁火は神聖な光とされたと思われる。そのもとで、その光に照らされる海人は、まさに神に等しい存在であったといえる。

#### 四 玉を取る・藻を刈る

釣の他に海人の作業として歌われるのが、玉をとること、藻を刈ることである。玉や藻も海産物であり、本来海の神の所有に属するものであるから、それらをとることの意味は魚を釣ることに等しいと考えてよい。しかし、この作業は釣と違い、必ずしも海人にしか出来ないというものではない。もちろん、潜水しての作業は別であるが、歌の表現を見る限り、浜辺で玉、藻をとることは海人でない者も行っている行為である。

しかし、用例を見ると、それは旅にある人が家づとにするため玉、藻をとると歌う場合が大半を占めている。従って、それ自体、極めて特殊な状況を背景としている行為らしいことが想像できる。そこでまず、玉を拾い藻を刈ることの基本的な意味を確認していこうと思う。

妹がため玉を拾ふと紀の国の由良のみ崎にこの日暮らしつ(巻  
七・一二二〇)

妹がためわれ玉拾ふ沖辺なる玉寄せ待ち来沖つ白波(巻九・一  
六六五)

玉とは何か。海からとれる玉なら真珠であろうということは容易に思いつくが、そう理解するには大きな問題がある。天然真珠を採取することは偶然に近い、極めてまれにしかあり得ないことだからである。<sup>(8)</sup> 浜に真珠が落ちていることなど通常では考えられない。

浜辺で拾えるものという、むしろ貝や石である。貝を拾う、という歌は多く、それらは玉の場合と同じとっていい程歌われ方がよく似ている。

妹がため貝を拾ふと血沼の海に濡れにし袖は乾せど干かず(巻七・一一四五)

おそらく実際に拾うとすれば、それは貝か石なのだろう。それらを何故「玉」と歌うのだろうか。

風土記逸文土佐国玉嶋条に次のような地名起源譚がある。

土佐の国の風土記に曰はく、吾川の郷。玉嶋。或る説に曰へらく、神功皇后、国巡りましし時、御船泊てき。皇后、嶋に下りて碇際に休息ひまし、一つの白き石を得たまひき。団きこと鶏卵の如し。皇后、御掌に安きたまふに、光明四もに出でき。

皇后、大く喜びて左右に詔りたまひしく、「是は海神の賜へる白真珠なり」とのりたまひき。故、嶋の名と為す。

皇后の拾った「白き石」は光を放った後、「白真珠」になった。

「白き石」と「白真珠」の間には明らかに一線が引かれている。「白き石」は光を放つという力をあらわした結果として「白真珠」と呼ばれたたのである。

波の寄せる浜辺は海との境界、神聖な場所である。そこに沖から寄せて来る石ならば、光を放たないまでも、何らかの靈威を持つと

考えられていただろう。それゆえ、浜辺の石や貝は「玉」と呼ばれ得るのではないか。

折口信夫氏は「玉」を「魂」の具体的に目に見えるもの、とした。また、密閉された貝や石を魂のいれものであるとし、魂がその中で成長し、やがてそれらを破って出現するとも考えた。<sup>(9)</sup> この考えからも、玉を拾う歌が歌われる意味を説明することができる。おそらく、海辺で貝や石を拾うことは、その中に宿る海の呪力を身につけることであつたに違いない。玉を拾う、という表現にはそうした意識がこめられている。

拾った貝や石は自分の身につけるばかりでなく、家の者への土産、「家づと」にもする。その意味もやはり海辺で得た異界からの呪力を家に持ち帰るといふことなのだろう。

巻一三、三三一八に「紀の国の 浜に寄すとふ 鰻珠 拾はむといひて」家を出て帰らない恋人を待つ歌がある。この場合、男が実際に鰻珠を拾うため家をでたということはあり得ない。旅にあっては家づとを得るのが常とされていたから、こうした表現になったのだろう。

鰻珠とは明らかに真珠である。真珠は密閉された貝の中でいつの間にか育ち、しかも美しく輝くものであるから、まさに大変強い呪力をもつ、理想的な玉であったと思われる。従って「鰻珠」は最も理想的な家づととして歌われる。それがこの三三一八歌の表現である。

ところで、同じく家づととして歌われるのが海藻、「玉藻」である。これも家づととされる以上、海の呪力の宿るものであろう。

まず、万葉集には「藻」という単独の言葉だけの用例がほとんど

見られない。歌われる場合、藻は全て基本的に「玉藻」としてある。「玉」という接頭語を持つことから既に、「玉藻」が呪力を持つ特殊な存在であると考えられることができる。更に、藻が「靡く」、藻を「刈る」という表現にもその特殊性があらわれている。

波のむたなびく玉藻の片思にわが思ふ人の言の繁けく(巻一二・三〇七八)

真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の原散る(巻一〇

・二〇九六)

今更に何をか思はむうちなびきところは君に寄りにしものを

(巻四・五〇五)

ある対象を靡かせる力は、目には見えないものの、一定の方向性を強く持っているらしい。「玉藻」を靡かせるのは波であり、二〇九六、五〇五ではそれぞれ「風」、「君」が靡かせる力となるている。

五〇五の場合、恋の相手に対して、魂が見えない力で吸い寄せられていくのが「靡く」状態であるといえる。自分をそれほど強くひき寄せる相手はそれだけに素晴らしいはずであるから、「靡く」と歌うことは、いわば靡かす呪力を持つ相手を讃える表現にもなっていると考えられる。

従って、浜などに藻が靡くと歌う場合、その表現は、その浜における強い呪力の集まりを示し、それによって浜を讃える表現となっている。藻はいわば靡きの強さの指標であり、海の呪力の宿る、神聖な依り代なのである。

更に、「刈る」についても考えてみる。

万葉集中、他に「刈る」と歌われるのは草、田などであるが、こ

れらを刈る動作と藻をとる動作はかなり違っているのではないかと想像される。そこで、「刈る」には動作を表すに留まらない、ある共通した意味を考えるべきであろう。

用例を見渡すと、刈られる草や稲は野、田など、神聖な場所に生えていることがよく示されている。また、葉脈がいわゆる平行脈であり、真直に伸び、成長する、強い生命力を感じさせる植物でもあると思われる。おそらく、これらのことから、草や稲にはその地の神の威力が宿り、あらわれていると信じられていたのだということが出来る。

つまり、「刈る」とは、人が稲や草などに宿る神の威力を手に入れることであり、藻を刈ることも、そうした意味あいを持つ行為であったらしいことが確かめられる。だからこそ、「玉藻」は浜づとなり得るのである。

先に述べたように、万葉集には、海人でない者が玉を拾い、藻を刈る、という例も少なくなかった。しかし、それは見てきたように、浜づと、つまり海の呪力を得るための一種の呪術的行為であったと考えることができる。それはむしろ、本来海人にしかできない作業を敢て自ら海人の立場に立った上でやっているのだと説明した方がよい。

藻を刈り、玉を取る、という作業の中で、明らかに海人にしかできないと想像できることに目を転じてみると、潜水があげられる。

海神の持てる白玉見まくり欲り千遍を告りし潜する海人(巻七・一三〇二)

潜する海人は告るとも海神の心得ずは見ゆといはなく(巻七

・一三〇三)

海人少女玉求むらし沖つ波恐き海に船出せり見ゆ（巻六・一〇〇三）

白玉の五百箇集を手にむすび遣せむ海はむがしくもあるか（巻一八・四一〇五）

一三〇二、一三〇三から、潜水の前に海人が何か呪文のようなものを唱え、海神の許しを得てはじめて玉をとることができたらしいことをうかがえる。潜水能力とは換言すれば神の世界に入る力のことである。海神の持つ玉をとる、などということは最高の呪力を持つ海人へのみ許された行為であるだろう。四一〇五ではそうした最高の存在である海人を讃えている。

この場合の「白玉」はまぎれもなく真珠であろう。真珠が稀にしか得られないものだからこそ、その方がこの歌の表現にふさわしい。一〇〇三は「恐き海に船出」する海人少女らの呪力を讃えるための表現であるはずである。

### 五 海人を歌う意味

これまで見てきたように、海人は漁労活動に従事し、それらの活動をほぼ独占していた。このことは単に彼らが海に生活し、そうした仕事に慣れているといったことに留まるものではない。海人以外の者がそれを試み、努力したところで、そうした活動は出来るものではないと考えられていたのだろう。

海は異界であり、普通の場合、人間の立ち入るべき世界ではなかった。その非日常的な空間を海人は日常的空間として生活している。それが海人の特殊性である。

だから、境界に住む特別な人間である海人と、彼らを歌う者との

間には絶対的な断絶がある。異界にあつて特殊な呪力を持つ者とあれば、海人は神と等しい存在と考えてもよい。海人の存在は単にも珍らしい習慣を持つ海の民であるに留まらない。それを前提としておかなければ、海人の歌われている歌は理解しづらいと思う。

海人はその対象の多くが旅中の歌によまれている。海人が異界に住む存在である以上、その姿は旅の中でしか見られるはずもないといえる。従って海人の表現としての意味を考える時、旅人にとって彼らが何であったのかを問うことが、おそらく重要になる。

旅について野田浩子氏は、それが自分の共同体の神の庇護下から離れる非日常の状態であり、それゆえに非常に危険な状態でもあったことを指摘している。<sup>(10)</sup> 旅人は常にそうした中におかれている不安をうち消し、鎮めつつ、旅の安全を保障していかなければならなかった。旅の歌もまた、そのためによまれたと考えられる。

海人は「見ゆ」と歌われることが多い。それをこうした視点から考えてみる。

わが背子を吾が松原よ見渡せば海人少女ども玉藻刈る見ゆ（巻一七・三八九〇）

この歌の「見れば……見ゆ」という形は国見の表現にもみられる。古橋信孝氏が国見について次のように述べている。

「……見ゆ」は、いわゆる自発であり、始祖の「……見れば」という行為に対して土地の側の応えになっている。つまり始祖の海の見るといふ行為に感応して、土地の側がその土地のすばらしさを示し、そこに始祖の海を迎え村立てをすることを許諾した。それを始祖の海の側から言うと思える、となるわけである。「歌謡」古橋信孝、『日本文芸史第一巻』、四二ページ）



始祖の海はよい土地を探して巡行し、その結果最高に素晴らしい土地を見つけ、そこで村立てをする。その表現の類型を古橋氏は「巡行叙事」と呼び、土地讚めの表現であるとしている<sup>(11)</sup>。

古橋氏はまた、旅の歌にこの「巡行叙事」が見られることも指摘している。旅人は自らを巡行する海の立場におき、土地讚めをする。神の位置に立つことと、その土地の神を称讚、慰撫することによって旅の安全が保障されることになる<sup>(12)</sup>。

海人が「見ゆ」と歌われる表現もこれと同質の意味をもつと考えられる。旅人が巡行する神として海を見ると、その土地の海である海人が見える。

「見る」ことが魂の発動であることを先に述べたが、この場合もまず「見る」ことが必要とされるべきだろう。そこで海人を「見にいこう」とする歌の多い事が思い出される。

旅人は見ることによって、まず海人にはたらきかけ、その異界の神としての呪力を領有しようとするのである。そうすることによって、自らの魂が活性化される。この点、浜や浦を見ることと同じである。「見ゆ」とはその結果、海人の呪力を受感し、領有したとする知覚だったと考えられる。

同じことが先に述べた「漁火」の歌にもあらわれている。これも「見れば……見ゆ」という表現形式をもつものがある。

紀の国の雑賀の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ（巻七  
・一一九四）

夜は本来、人間の出歩くべき時間ではない。まして漁火は闇に光る神の火である。そのような漁火を見ること自体、恐れられていたはずである。或いは強い禁忌でさえあったとも想像できる。それを

なぜ、わざわざ「雑賀の浦に出で」てまで「見」なければならないのだろうか。

それはやはり、旅人が自らを神の位置においたための行為であろう。神ならむしろ夜にこそ行動すべきであるし、異世界の畏怖すべき神の火を「見る」ことは魂の活性化のため、必要な行為であった。その強い呪力を得て、旅人は続く旅の危険から身を守ろうとするのである。

巻一六に「怕しき物の歌三首」（三八八七～三八八九）という歌があるが、そのうちの一首はこの事に関連していると思われるものである。

八） 奥つ国領く君が塗屋形黄塗の屋形神が門渡る（巻一六・三八八）

中西進氏はこれらに「怕しきものをよんだ歌で、魔除けの呪歌」との注をつけている<sup>(13)</sup>。この歌の場合、「奥つ国」「神が門」という語や、「塗屋形黄塗の屋形」というくり返しが強い呪力を持つ表現となっており、その言葉の呪力で魔をはらったのだと思われる。

この屋形船は海の奥の神の乗り物であっただろう。漁火をともし、闇の中、沖に漂う海人の船もやはり神の乗り物であり、畏怖すべき対象である。漁火を歌った歌も、本来、こうした呪歌としての性質をもつ歌だったのかもしれない。

旅において海人を歌うということは、歌う者にとって異界である土地の海を歌うということと同義であった。それによって彼らを讚え、また彼らのもつ呪力を手に入れようとしたのである。その目的は、くり返すように、旅の安全を保障するところにあった。特に海を旅する時に、これらの歌は必ず歌われなければならなかったと

思われる。海の神と通じるためには、海人の呪力に頼るほかはなかつたからである。

このように考えてみると、気にかかる歌が残されている。

浜清み磯にあが居れば見る者は白水郎とか見らむ釣もせなくに  
(巻七・一二〇四)

潮早み磯廻に居れば潜する海人とや見らむ旅行くわれを(巻七  
・一二三四)

磯など、海辺にいるのは普通、海人であるから、そこにいること  
によって海人と見誤まれることは、確かにありそうなことである。

しかし、おそらく海人とそうでない者とは服装からしてかなり違  
っていたと思われるから、実際に海人と見誤まれることはまずな  
かったと考えられる。従って、「海人とや見らむ」はむしろ表現の  
問題としてとらえるべきだろう。こうした歌は他にも多いが、なぜ  
このような歌が存在するのだろうか。

一二〇四に「見る者」という言葉があるが、それは誰のことを意  
味しているのだろうか。これらの歌ではいずれも「見る」主体がは  
つきりとは限定されていない。「見る者は全て」ということであろ  
うか。仮にそうであるなら、見る者が全てこの歌い手を海人と見る  
ことによって、彼は海人として位置づけられるのだと考えられる。  
この表現はそれだけの力をもっていいえないだろうか。

旅人は海人となることによって、異界に放逐されることになる。  
しかし、それは新しい呪力を身につける機会ともなり得る。その代  
表として先に述べた火遠理命をあげることが出来るだろう。もちろ  
ん、実際に海人になることは不可能である。だからこのような歌を  
歌い、歌うことによって自らを海人の位置においたのである。

これらを、旅に漂い、うらぶれた自分を嘆いている歌だと解釈す  
ることもできるし、そうした一面はたしかに捨てがたくある。しか  
し、海人はただ卑しまれる一方の存在ではないこと、さらに海人と  
旅人との間の決定的な断絶の存在を思うと、あえて「海人とや見ら  
む」と歌ったことに、もう少し積極的な意味があったと考えたい。

特に一二三四は「瀬早み」とあるように、海の状態が悪く、船出  
を見あわせている時に歌われたのだと考えられる。そのような時で  
あればなお、不安を鎮め、海の神と通じる呪力を強めたかったはず  
である。一二三四はそういった必要性に応じるための歌であったと  
思われるのである。

時代が下るにつれて、海人は蔑視される傾向が強くなっていく。  
それはおそらく、異界の者への裏返し of 感情のあらわれにすぎない  
だろう。さらに、平安期になると、海人の恐れられ、讃えられた  
一面はほとんどみられなくなるようであるし、海人が歌われること  
自体、万葉集と比べるとかなり減ってしまう。海人を歌う意識のこ  
うした変化は、実は万葉の中で、既に始まっているようにも感じら  
れる。

これまで述べてきた「海人」の意味はごく基本的、原型的なもの  
であるといえるだろう。それがどのように変化していったかを正確  
に調べることは、歌に対する意識の変化を読みとることに通じてく  
るかもしれない。ここではその変化をたどるまでに至らなかつた  
が、「海人」の用例を更に詳しく検討し、そうした流れの中に位置  
づけていくことを次の課題として、本稿をその足がかりとしていき  
たい。

- 注(1) 『古事記』・『日本書記』・『風土記』本文の引用は日本古典文学大系による。
- (2) 大岡小霧「ヒルコの誕生と放流をめぐる一考察」『語文論叢』第一四号、昭和六一年九月、千葉大学文学部国語国文学会。
- (3) 「古代生活の研究・常世の国」『折口信夫全集第二巻』、昭和六〇年一月、中央公論社(中公文庫)。
- (4) 「清けし」については、野田浩子氏の論文(『さやけし』の周辺——〈清なる自然〉試論2——)、『古代文学』二四、昭和六〇年三月)を参考にした。
- (5) 中西進「古代的知覚」『万葉集原論』、昭和五十一年五月、桜楓社。
- (6) 大林太良「沿海と内陸水界の文化」『日本の古代第八巻 海人の伝統』昭和六二年二月、中央公論社。
- (7) 多田一臣「古代人と夜」『語文論叢』第一五号、昭和六二年。
- (8) 田辺悟「海人の伝承文化」『日本の古代第八巻 海人の伝統』に検証がある。
- (9) 「剣と玉と」『折口信夫全集第二巻』、「靈魂の話」同第三巻。
- (10) 野田浩子「旅との出会い」『日本文芸史第一巻』昭和六一年五月、河出書房新社。
- (11) 古橋信孝『万葉集を読みなおす』NHKブックス472、昭和六〇年一月、日本放送出版協会。
- (12) 『日本文芸史第一巻』四三ページ、また注(11)も参照した。
- (13) 『万葉集全訳注原文付四』講談社文庫、の注、なお『万葉集』の用は全て同文庫による。